SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

# The Uses of Group Work in Lesson Introductions during Music Class : Class Year Adaptations and in-class Participation



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-11-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 田窪, 祐実<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.14945/00026896 |

# 音楽科授業の導入時間を用いたグループ・アプローチの効果

～学級適応感と授業への参加姿勢を視点として～

田窪　祐実

The Uses of Group Work in Lesson Introductions during Music Class:

Class Year Adaptations and in-class Participation

Yuumi TAKUBO

## １．　問題の所在と研究の目的

近年、核家族が増加傾向にあること、地域や家庭の教育力が低下していること、インターネット、ゲームでの遊びが増えている等、子ども達を取り巻く環境が変化してきている。それに伴い、子ども同士の交流の場、自然体験など、子どもにとって必要な体験が減少してきた結果、いじめ・不登校などの問題が発生しつつある。子どもの遊びの幅が狭くなっていたり子どもの遊びの孤立化が進んでいたりする（村瀬・落合 2007）ため、大人が介入しての体験補完の必要性が考えられている。そして、中央教育審議会答申、学習指導要領等、学校現場においてもその必要性がいわれ、体験活動の充実が進められている。縦割り活動、集団宿泊体験など、大きなイベント事にとどまらず、「体験的に学習する」「体験的に学ぶ」という文言は特別活動の他、各教科の指導要領や生徒指導提要においてもみられ、体験的な学びのエッセンスが教育現場へ導入されてきた。

実際、学校現場では、静岡県「人間関係づくりプログラム」（１時間×４回）やさいたま市「人間関係プログラム」などの体験の補完プログラムが存在する。しかし、静岡県の「人間関係づくりプログラム」は、人間関係づくりにおいて効果がある一方で、活動の累計時間が同程度であるならば、短時間のプログラムを繰り返し実施した方が、年数回の特別授業形式で行うよりも、「予防的・開発的教育相談」の効果は高いことが、高柴(2016)により指摘されている。そこで、子ども達にとって身近である教科指導においても、コミュニケーションを学ぶ人間関係づくりの要素を補っていくことが必要ではないかと考えた。音楽科は体験活動が授業の多くを占めており、①知的な遅れ等が影響しにくく、どんな子どもでも参加しやすい、②集団が苦手な子どもも、楽曲やリズムを媒介にして集団に入りやすい、というメリットがある。子どもたちのよりよい人間関係づくりのために、音楽科授業の導入時間を活用し、グループ・アプローチの実践を行い、その効果等を検証することを目的とする。

## ２．　研究の方法

A 市立 B 小学校の５年生３クラス（８１人）を対象とし、音楽科授業にて、導入時間を用いた短時間のグループ・アプローチを継続的に行い，学級適応に課題をもつ児童と、その学級を支援していくこととする。わかりやすく、単純なゲーム感覚でできる短時間のグループ・アプローチを実践した。また、授業の一部を使って行う活動であるため、グループ作りの目的達成でとどまらぬよう、その日の授業の活動に合うプログラムを計画した。

毎時間の活動終了後には、徳田(2011)による一時的気分尺度（TMS）を参考に全６項目からなる質問紙調査を実施し，児童がどんな姿勢で授業へ参加しているのかを調べた。質問文は小学生でも理解できる易しい表現に改め、厳選した。さらに、江村・大久保（2012）による学級適応感尺度を用い、月に１回程度の頻度で学級適応感を測定した。

## ３．　グループ・アプローチ（導入時間セッション）実践の結果

学級適応感の質問紙調査は、グループ・アプローチの実施前に１回、実施中に２回、実施後に１回、月に１回程度の頻度で計４回計測した。１回と４回目の相関が高く、変化が見られにくかったため、相関の弱い１回目と３回目をもとに、学級適応感が上昇した群、あまり変化しなかった群、下降した群の３つに±0.5SD を基準として群分けした。

### （１）上昇群、下降群の学級適応感の変化

１回目と３回目で学級適応感が有意に下降した群は、１回目の得点が高く、上昇した群は１回目の得点が低かった。2 回目は、有意差が見られなかったが、少し逆転しているのが見える。そして、有意差の見られた３回目では、完全に逆転しており、４回目には格差が縮まり、ほぼ横並びの状態となった。

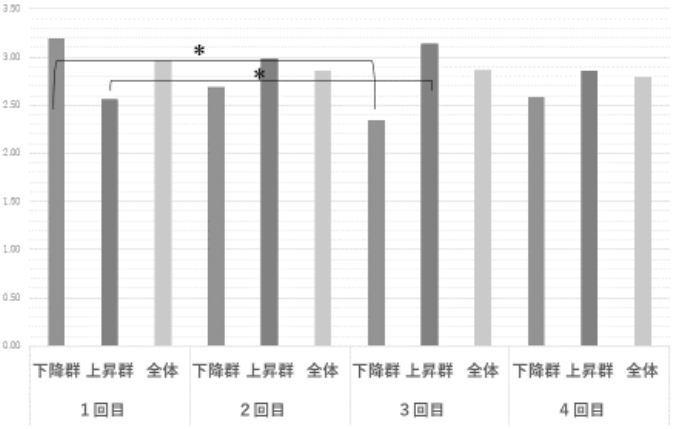



図１　群別学級適応感の変化

### （２）学級適応感の変化と一時的気分の関連

学級適応感の変化と一時的気分の関連について述べる。なお，一時的気分の質問項目は、①楽しい気分だ②暗い気持ちだ③おちついている④やる気がある⑤へとへとだ⑥むしゃくしゃしている、の６項目で，４段階評定を求めた（図 2)。

今日の「ららら タイム」を終えて、今の気分はどうですか。　　月　日

年　組　番　名前（　　）

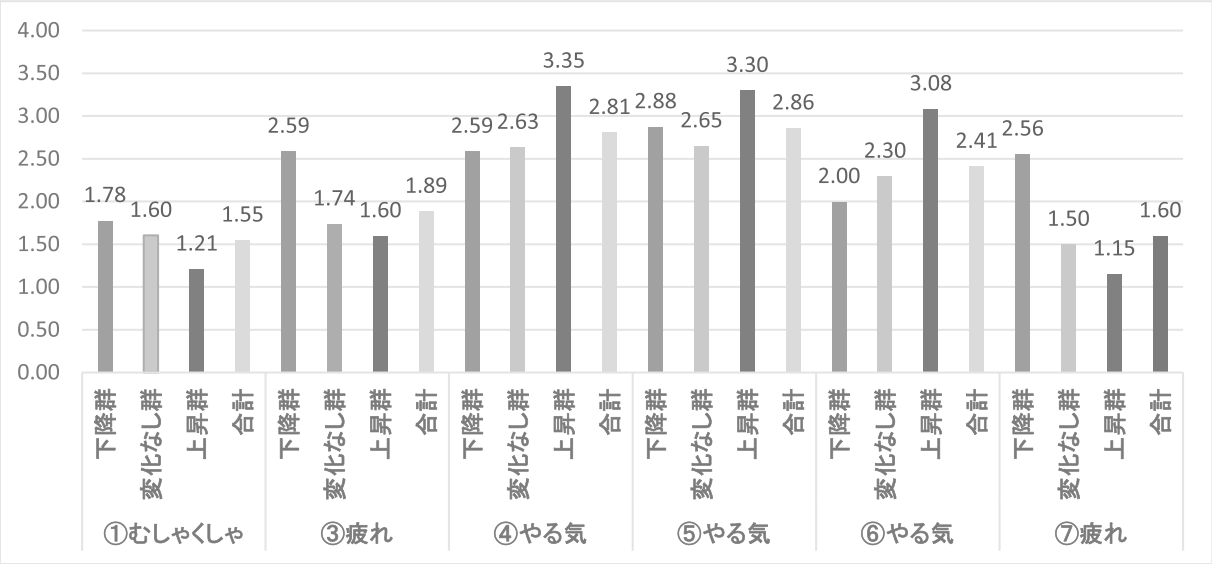
| 質問 | とてもよく あてはまる | どちらかといえば あてはまる | どちらかといえば あてはまらない | まったく あてはまらない |
|---|---|---|---|---|
| ①楽しい気分だ | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ②暗い気持ちだ | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ③おちついている | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ④やる気がある | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑤へとへとだ | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑥むしゃくしゃしている | 4 | 3 | 2 | 1 |

図２　一時的気分　質問紙

学級適応感の３つの群と一時的気分の関係について、１回目セッションでの「むしゃくしゃ」、３回目と７回目セッションでの「疲れ」、４回目、５回目、６回目セッションでの「やる気」の項目において有意差が見られた。

## 4. 考察

以下、有意差が見られたセッション内容と関連付けた考察である。



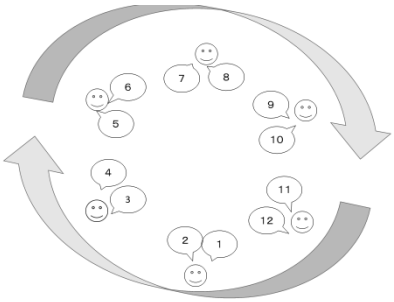

有意確率　.074　.010　.029　.058　.032　.000

○の中の数字は、セッションの回を表す

図３　群別にみた一時的気分

表２　セッション内容と考察

| セッションの概要<br>◎教科としてのねらい<br>○グループづくりのねらい | セッション内容から考えられる考察 |
|---|---|
| （第１回）ぶた、いぬ、ねこ、ライオン、などの動物カードをクラス全体に配る。言葉は使わず、「ワンワン」、「ニャー、ニャー」等、鳴き声だけで同じ動物の仲間を集める。集まれた班はその場に座る。<br>◎声を出し、コミュニケーションを図る。<br>○恥ずかしさを軽減し、声を出す準備とする（発声練習ではない） | 「むしゃくしゃ」と適応感の関連考察<br>学級適応感が上昇した群の１回目のセッションの一時的気分「むしゃくしゃ」の平均は 1.21 であり、とても低い。学級適応感が下降した群の平均が、1.78 と上昇群に比べて 0.57 高かった。初回であるセッションに慣れておらず抵抗があったために、むしゃくしゃしてしまったのではないかと予測できる。また、動物の鳴き声を真似て活動するものであったが、学級適応感が上昇した群の中を個別に見てみると、困り感のある、なしに関係なく、活発な児童が多かった。また、下がった群に比べ、素直な子どもっぽさが残っている児童が多い印象である。童心に帰ることができ、安心感があったのではないかと考えられる。逆に、下がった群は、大人びた女子や、控えめな男子が集中しており、セッションの相性の良さ、悪さが |

| | |
|---|---|
| | 出ているとも想像できる。 |
| （第３回）６～７人１組で円になる。両手を使い、床をたたく。リズムにのって、１人２回手拍子を打つ。途中、隣の人と手をクロスして、難易度を上げてみる。<br>※席の移動に時間がかかってしまったため、２クラス目以降は、席についたまま机をたたき、音を鳴らす方法に変更。<br>◎学級の友人との一体感を感じる。<br>○拍子感覚を獲得する。<br><br> | 「疲れ」と適応感の関連考察<br>学級適応感が上昇した群の「疲れ」の質問の平均は 1.60 である。この回のセッションは、手拍子を隣の席の児童に回し、一定のリズムを作っていく活動であった。男女混合の６人グループの環境設定の中、リズム良く、手拍子を回していくゲームの難易度を上げるために、手をクロスする場面があった。そこで学級適応感が下がった群のような大人びた女子児童や、周りから避けられ気味の児童とチームを組んでいる児童から、「これは恥ずかしい」、「この人と近づくのや嫌だ」、という声があった。学級適応感の下降群の平均値は、2.59 と、かなり疲れており、やりたくない活動を無理して活動したことが原因であると推測できる。逆に、学級適応感が上昇した群の平均値は 1.60 となっており、ほとんど疲れていなかった。対人関係のストレスが影響していないと伺える。<br>（セッションは、どのクラスも同じ日に実施していたので、初回実施のクラスで、反応が良くなったことを活かし、２回目、３回目に実施したクラスでは席についたまま机をたたいて音を鳴らす方法に変更した。すると、児童のからの「隣の人と体が触れ合うのが嫌だ」という声も少なくなり、「ちょっと恥ずかしいけど、やっちゃおう」という反応に変わった。児童の前向きな参加姿勢の効果もあり、実施に要する時間が短縮し、スムーズにセッションを行うことができた。） |
| （第６回）トーンチャイムを使い、「かえるの歌」を輪唱しながら、トーンチャイムで和音を構成し、伴奏付けをしていく<br>◎クラス全体で作る合奏、合唱の雰囲気を楽しむ。<br>○歌声は、つぶれた声を出すのではなく、トーンチャイムのように、響きのある声を意識できるようにする。 | 「やる気」と適応感の関連考察<br>適応感の上昇群の平均値は 3.08、下降群の平均値は 2.00、あまり変化しなかった群の平均値は 2.30 であり、この回では、やる気に差が見られた。適応感の上昇群と下降群の間にできた差は、童謡を歌えるかどうかの差であると考えられる。実施中の児童の様子は、普段の合唱では声を出せるのに、このセッション中の声の大きさ、は小さくなってしまった。恥ずかしさから、歌えない児童が現れたと考えられる。誰でも知っている童謡を、恥ずかしがらずに歌えたのは、やはり、大人びていたり、静かで控えめでいたりする児童ではなく、活発な児童が |

| | |
|---|---|
| | 多かった。進んで参加できる児童が少ないということは、改善の必要性がある。 |
| （第７回）トーンチャイムを鳴らすタイミングを合わせる。２人１組からスタート。（合わせる際の「せーの」等の掛け声はなし、ノンバーバル。ジェスチャー等は可能）徐々に人数を増やし、最終的には、学級単位でタイミングを合わせることを目標とする。息を合わせる方法を試行錯誤する。<br>◎息を合わせる楽しみ、意見を出し合う楽しみを経験する。<br>○合唱の際、互いの音を聞いて合わせる。 | 「疲れ」と適応感の関連考察<br>適応感の上昇した群の平均値は 1.15 と、あまり疲れておらず、下降した群の平均値は 2.56 と、上昇した群と 1.41 の差が生じた。タイミングを合わせて楽器を鳴らすことは難しく、楽器を持っていない児童も、作戦を考えること、タイミングを合わせる補助役で活動に参加した。タイミングを合わせるために、ジェスチャーをしたり、作戦を話し合ったりする活動が生まれた。楽器を持っていない児童は、楽器を持っている児童に対して、どうしたらタイミングが合うのか、アイディアを出したりタイミングを合わせる合図の補助をしたりした。これが、適応感の下降した児童にはストレスであり、疲れてしまったのではないかと考えられる。 |

**学級適応感と一時的気分の相関について**

フレデリクソンによる、ポジティブ感情：ネガティブ感情＝３：１の比率であると、うまくという拡張形成理論がある。図３より、適応感が上昇した群は、ポジティブ感情（楽しい、落ちつき、やる気）をより多く経験し、適応感が下降した群は、ネガティブ感情（暗い、疲れ、むしゃくしゃ）をより多く経験していた。

学級適応感とセッション後の一時的気分の相関関係を時系列に沿い、有意な相関関係が見られた箇所について、結果と考察を述べる。

まず、学級適応感全体と楽しさの相関について、順に、$r$=0.221、0.347、0.319、0.267、(0.172)、(0.11)、0.358、(0.119）であった。() の中の数字は、相関が弱かった箇所であるが、多くの回で有意な相関係数が得られた。これより、学級適応感の高い子ども達はその場で楽しむことができることが伺える。

次に、学級適応感全体とやる気の相関について順に、$r$=0.318、0.308、(0.158)、(0.193)、0.261、(0.128)、0.330、(0.238）と、有意な相関係数が一部、得られた。

そして、学級適応感の下位尺度である、学習意欲と一時的気分のやる気の相関について、順に、$r$=0.372、0.261、(0.158)、(0.193)、(0.353)、(0.199)、0.417、0.391 と、有意な相関係数が一部、得られた。

以下、一時的気分同士の相関について、述べていく。まず、楽しさとやる気の相関は、順に、$r$=0.672、0.672、0.768、0.704、0.754、0.606、0.602、0.490、とすべてにおいて、有意な相関係数が得られた。これより、ポジティブな感情は、他のポジティブな感情につながることが伺える。

次に、暗さとやる気の相関は、順に、$r$=-0.446、-0.446、-0.496、-0.430、-0.384、-0.286、-0.509、-0.433、とすべてにおいて、負の相関関係が見られた。これらの結果より、その場の意欲を高めるに

は、楽しいという、ポジティブな感情を経験する必要があると伺える。

また、楽しいという感情は必ずしも毎回ではないが、気持ちを落ち着かすことにつながり、ポジティブな感情は、気持ちの面においての学習環境を整えることができると考えられる。

総合的にみると、ポジティブ感情を経験することは、学級適応感を高くすることに関わってくることが分かる。また、月に 1 度程度計測した学級適応感の下位尺度である学習意欲は一時的気分のやる気との関係が見られないが、一時的ではあるが、1 時間の授業単位で考えた際、その場の楽しさはその場のやる気に大きく影響するのが顕著に表れたため、日々のポジティブ感情の積み重ねが必要であることが伺える。

## ５．　まとめと今後の展望

今回の研究では、セッションにおける気分が学級適応感の改善に寄与することが一部認められ、学級適応感が上昇した子どもたちは、ポジティブ感情をより多く経験していることが分かった。そして、学級適応感の下降した子どもたちは、周りの児童と接触したり、話し合いがあったりするプログラムであると、疲れてしまう、参加度が低くなる、という結果が得られた。また、対人関係の観点から、自作のセッションには難易度があるのではないかと考えられる。グループ・アプローチのうちの１つである ASE プログラム：Action Socialization Experience Program にも体の接触が少ないものから、多いもの、話し合いの必要性が少なくて済むもの、たくさん必要なもの、と様々な段階がある。授業におけるグループ・アプローチでも、児童同士の関係性を段階的に深めていくには、身体の接触が少ないもの、話し合わずに済むもの、個人が教室で目立たずに参加できるプログラムから入り、児童同士の関係、授業への参加度合いを考慮しながら徐々に難易度を上げていく事がよいと考えられる。また、発達の進行が早い一部の女子の一時的気分の質問紙の回答値が低かったり、セッションへの参加を面倒と感じているような行動も観察されたりした。今回の実践が必ずしもすべての子どもにとって有効であるとは言えないという結果からは，クラス全体が楽しむことができ，安心感や他の子どもの理解と受容が進むことを目指したグループ・アプローチの導入に関しては，乗り越えなければならない課題が存在していることを示している。よりよい人間関係づくりのために、さらなる改善をしていきたい。

【主要参考文献】

高柴弥生(2016).高等学校における予防的・開発的教育相談の試み：静岡県教育委員会作成『人間関係づくりプログラム《高校生版》』及び『生きる力～ライフスキル』の活用とリデザイン 教育実践高度化専攻成果報告書抄録集(静岡大学大学院教育学研究科), *6*, 85-90.

徳田完二(2011). 一時的気分尺度（TMS）の妥当性　立命館人間科学研究, *22*, 1-6.

江村 早紀・大久保 智生(2012).小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連 : 小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討 発達心理学研究, *23*, 241-251.